

1 生徒の実態（実態把握・調査結果の分析）

（1） 生徒の実態

- 1年生：授業中に積極的に質問をする等、内容に関して不明な点を理解しようという姿勢が見られる。一方で、基礎的な計算能力や筋道を立てて考える能力に課題が見られたり、小学校算数科における知識を確認したりする必要のある生徒が多い。
- 2年生：授業態度は概ね良好である。各単元の導入等では関心をもって学ぶことができるが、計算の練習や考え方の応用をする場面では、取り組む姿勢にやや課題が見られる。また、生徒間で数学的な能力に大きな差がある。
- 3年生：授業は真剣に取り組んでいて、提出物は多くの生徒が期日までに提出できている。計算の能力は比較的高めであるが、一段階、二段階応用させた問題に対し、辛抱強く考えることを苦手とする生徒が多い。

（2） 調査結果の分析

- 1年生：家庭学習の習慣化に大きな課題がある。約半数の生徒が、家庭において学習をしていないと回答している。家庭での練習不足が、基礎的な数学の能力に影響していると考えられる。
- 2年生：家庭学習の定着と忘れ物について、多くの生徒は良好のようであるが、あまりできていないと回答した生徒も、ともに一定数いた。このことは普段の授業態度からも伺えるものである。
- 3年生：家庭学習が習慣となっている生徒が多い。また、提出物や宿題は決まった生徒の忘れが多く、結果として表れている。また、その他の調査結果から伺えるように、授業に集中し、真剣に取り組んでいることが分かる。

2 指導上の課題

- 1年生：1学期では基本的な計算能力に課題が見られた。非常に多くの生徒が、学習した計算の方法などを次の授業では覚えていなかったり、忘れていたりした。そのため、既習事項を基に未習事項を考えていこうとする数学の基本的な姿勢を身につけることが難しかった。授業で学習した内容を自ら使うことができるような力を身に付けさせる必要がある。
- 2年生：各単元の導入では興味をもって取り組むことができる。しかし同単元でも内容が難しくなると、自分には分からないものとして投げ出してしまいう傾向がある。ある方法で間違えたら、他の方法で探し出すといった地道な努力を続けるという力をつけていく必要がある。
- 3年生：生徒は受験を控え、問題が解けるということに達成感をもっている。そのため、自分が解けない問題や内容を遠ざける傾向がある。これは数学を解けるか解けないかでしか捉えられていないということの表れと考えられる。問題の結果だけではなく、問題を解くプロセスを大切にする指導が必要である。

3 授業改善の視点とその方策

三学年を通じて、基礎基本の徹底と数学の面白さを実感できるような教材の工夫をしていかなければならないと考える。1年生については、特に小学校算数科を振り返り、数学に活用できるよう指導を行う。2年生については、基本的な計算技能をさらに充実させ、文章題などの応用についても対応できるようにするとともに、内容が難しくなったときには、生徒全員が関心をもてるような教材を扱っていく。3年生については、問題の解答のみを評価するのではなく、教員が生徒の解き方を理解するよう努める。また、解く過程を楽しめるような教材を準備していく。以上のことから、三学年ともに、上の二つを改善の軸としていくことに意義があると考えられる。

具体的には、授業の内外で以下のように取り組んでいく。

- 授業の開始時に数問の計算問題に取り組み、既習事項の理解を進める。また、何が自分にとって弱点なのかを理解させ、家庭学習の一助とする。
- 問題の結果だけでなく、解く過程を評価するために、様々な解答や解き方が考えられる教材の開発を行い授業実践する。これを扱うことで、学習内容が難しいものであっても、一人一人が考えようという姿勢をもつことができると考える。
- 上のような教材を効果的に用いるために、普段の授業において、問題解決的な展開を進めたり、話し合い等をして自分の言葉で表現できるよう指導をしたりしていく。

4 その他

- ・ドリル学習において既習事項の確認を行う。
- ・定期考査前に補修教室を開講し、生徒が自主的に学習する場を提供する。